



民俗海左

第176号 令和8 (2026) 年1月発行 ©堺民俗会 Since 1947

下谷佐吉氏遺稿 (5)

里山を目指す人々

下谷佐吉

かなり前、近江富士花緑公園での「里山フォーラム」に参加者した時の内容を回想してみる。

1、近江富士・三上山の伝承

開催地のランドマークは名神高速道からよく見える秀麗な近江富士である。この山の麓に御上神社があり、山そのものが御神体で正式山名三上山（みかみやま）と呼ぶ。その山には二つの伝説が窺える。一つは八百足退治だ。

平安時代、武勇に優れた倭藤太（藤原秀郷。子孫・奥州平泉の藤原氏三代、歌人の西行）がいた。瀬田の唐橋に大蛇が横たわり、



近江富士

人々は通れなかったが、彼は怖がることなくその大蛇を踏みつけて橋を渡った。橋の下でその豪傑ぶりを見ていた龍神は



近江国むかでやまゆらい

「三上山を7回り半巻き付いた八百足が山野を荒らして困っているから退治してくれ」と依頼した。彼は唐橋から強弓を放って八百足を退治した。そのお礼に藤太は竜宮でもてなしを受け、沢山の宝物をもらった。その中の釣鐘は三井寺に奉納されたと云われている。

二つ目

は紫式部が詠んだと伝わる「打ち出でて三上の山をながむれば雪こそなけれふじのあけぼの」という和歌から、富士山のような形は昔から考えていたことがわかる。ただし近江富士の呼び名が盛んになったのは江戸時代頃からだとされる。

2、里山フォーラム

全体会場の「里山の家」は昭和初期の滋賀県の茅葺の民家を復元した建物だった。中に入ると、小さい頃に見覚えのある土間、炊事場・カマドが見られた。座敷は仕切りのフスマを取り外して火鉢を置き、村の寄合をするような懐か



昭和初期の里の家

しい大広間になっていた。フォーラムのねらいは「里山に暮らす人の思いや活動状況の関わり方等を考える」である。オープニングは岐阜県の人手作り鼻笛を鼻にあてがい「四季の歌・春を愛する人はこころ清き人・・・」と哀愁の漂う音色が聞かれた。

その後は役員の指示に従って小グループでの自己紹介から始まり様々な立場の人との交流となった。学校の先生もいて「このフォーラムで話し合ったことを子ども達に伝えます」と言っていた。

昼食後は「里山の価値、意味」等をいくつかの班に分かれて談話した。夕食時は1班7人程でそれぞれロッジに行つて自炊し、出来上がった鍋物を囲んで交流を深めた。8時から全体会で「ふるさと館」の広間に集まり、各地区代表の活動紹介があった。

翌朝、私は7時に起床して、うつすらと雪の残る近江富士の中腹まで散策し、ツグミ、ヤマガラ、シジュウガラの野鳥や珍しいカエデ科のハナノキを観察した。

左海民俗 第一七六号

令和8(2026)年1月

発行人 佐原 浩二

編集者 佐原浩一・北埜秀夫・
一色若夫

印刷所 (株)アイティ印刷

ブログ

<https://ameblo.jp/skmz2014>

年会費 40000円

郵便振替 009300-7-317576